



ナシ炭疽病の薬剤感受性



写真1 ナシの葉の病徴



写真2 ナシの葉柄部の病徴

写真3 アゾキシストロビン0.78ppm
添加培地上の菌そう

表1 ナシ炭疽病菌のベノミルに対する感受性(菌株数)

薬剤濃度(ppm)	0.1	1	10	100	600	800	1,250
菌糸の生育有り	51	51	51	0	0	0	0
菌糸の生育無し	3	3	3	54	54	54	54

表2 ナシ炭疽病菌のアゾキシストロビンに対する感受性(菌株数)

薬剤濃度(ppm)	0	0.1	0.2	0.39	0.78	1.58	3.13	6.25	12.5	25	50	100
菌糸の生育有り	54	54	54	54	49	48	47	47	32	0	0	0
菌糸の生育無し	0	0	0	0	5	6	7	7	22	54	54	54

ナシ炭疽病(病原菌:*Glomerella cingulata*)は、はじめ葉に黒色の微小な斑点を生じ、やがて葉を黄化、落葉させる病害です(写真1、2)。高知県内では、1998年にベノミル(ベンレート水和剤)耐性菌の発生により本病が大発生し、近年再び発生が増加する傾向がみられています。使用頻度の高い薬剤に対する感受性の低下が疑われたため、2009年に‘新高’の主要産地から発病葉を採取し、分離して得られた病原菌54菌株を用いて、ベノミル、アゾキシストロビン(アミスター10フロアブル)に対する感受性検定を行いました(写真3)。

その結果、ベノミルについては800ppmにおいて生育する高度耐性菌は検出されませんでした。10ppm以下で生育する中等度耐性菌が51菌株検出されました(表

1)。なお、中等度耐性菌、高度耐性菌ともベノミルによる防除効果が劣るとされています。アゾキシストロビンについてはイチゴ炭疽病では3,200ppmでも生育するものが耐性菌とされており、今回調査した菌株については25ppm以上で生育する菌株はなかったことから、全て感受性と考えられました(表2)。

以上の結果から、ベノミル(ベンレート水和剤)はナシ炭疽病に対する防除効果が劣り、アゾキシストロビン(アミスター10フロアブル)は現在のところ防除効果が高いと考えられました。しかし、アゾキシストロビンは多くの病害で耐性菌の発生が報告されていることから、連用を避けて防除することが重要です。

(病理担当 山崎睦子 088-863-4915)

高知県農業技術センターニュース 第63号 平成23年3月25日

編集発行 高知県農業技術センター 所長 岩崎 昭雄

農業技術センター

〒783-0023 高知県南国市廿枝1100

TEL (088) 863-4912

FAX (088) 863-4913

<http://www.nogyo.tosa.pref.kochi.lg.jp/kikan/kenkyu/se/home/>

農業技術センター山間試験室

〒789-0315 長岡郡大豊町中村大王3523-7

TEL (0887) 72-0058

FAX (0887) 72-1544

<http://www.nogyo.tosa.pref.kochi.lg.jp/kikan/kenkyu/se/home/>

果樹試験場

〒780-8064 高知市朝倉丁268

TEL (088) 844-1120

FAX (088) 840-3816

<http://www.nogyo.tosa.pref.kochi.lg.jp/kikan/kenkyu/kaju/index.htm>

茶業試験場

〒781-1801 吾川郡仁淀川町森2792

TEL (0889) 32-1024

FAX (0889) 32-1152

<http://www.nogyo.tosa.pref.kochi.lg.jp/kikan/kenkyu/tya/index.htm>